

マツカリ・ゴーサーラと

サンジャヤ・ベーラツテイプツタ

ハ付▽「漢訳六師外道資料一覽表」

辻本俊郎

Dighanikaya no. 2 *Samaññaphalasutta* (長部第二經

『沙門果經』、相当漢訳長阿含經第二七經『沙門果經』、増一阿含經卷三九(七)、異訳『寂志果經』)などには、仏教興起時代を代表とする自由思想家、いわゆる「六師外道」の名とその学説が伝承されていることはよく知られている。その六師とその学説の要点を紹介すると次のようになる。

① *Purana Kassapa* (*Purana Kāśyapa*)

祭祀を行っても、布施などの善行を行っても、また、自己を克服し、感覚器官を制御し、真実を語ることによっても、善が生じることもなく、善の果報も存在しない。

生き物や人間の身体を切断したり、苦しめたり、悲しませたり、生命を奪っても、また、与えられな

い物を奪い、他人の家に侵入したり、略奪したり、強盗したり、追剥をしたり、他人の妻と通じたり、嘘をついたとしても悪をなしたのではなく、悪行の果報も存在しない。

② *Makkhali Gosāla* (*Makkhali Gosāliputra*)

一切の生きとし生けるものには意志に基づく行為は成立しない。八百万の大劫の期間に、愚者も賢者も輪廻しつづけ、やがて苦の終わりに至る。その期間にあつては解脱することは不可能である。あたかも毛糸の球を投げると糸が終わるまで転がっていくように愚者であつても賢者であつても定められた期間は流転しつづける。

③ *Ajita Kesakambalin* (*Ajita Kēsākambalin*)

人間の身体を構成する要素として地・水・火・風の四つの元素があり、人間が死ぬと、人間の身体を構成していた四つの元素は地・水・火・風そのものに戻って行く。死後、靈魂は存在せず、来世も前世も存在しない。善行、悪行の果報も存在しない。また、布施も祭祀も供儀も無意味である。

④ *Pakudha Kaccyana* (*Kakudha Kacciyāna*)

人間の身体は七つの集合要素(地・水・火・風・

苦・楽・靈魂)から構成されている。七つの集合要素は、作られたものではなく、山頂のように不変であり、石柱のように不動である。したがって、殺すものもなく、殺させるものもなく、教えを聞くものも聞かせるものもなく、知るものも知らしめるものも存在しない。たとえ鋭利な剣によつて頭を断ち切つても、何人も生命を奪うことはない。ただ剣が七つの集合要素の間を通過するにすぎない。

⑤ Sañjaya Belatthiputta (Sañjyvin Valatthiputra)

善悪行の果報に関して、来世に関して、如来の死後に関して、いわゆる形而上学的な問題を問われると、あいまいな返答しかなかった。

⑥ Nigāntha Nātaputta (Nirurantha Jhāputra)

すべての水を用いることを禁じ、すべての水を離れ、すべての水を除去し、すべての水によつて満たされている。このように四つの制戒による制御によつて守られている。

彼らは正統バラモン教の思想に対し、異説を唱え、その多くは業因果を信ぜず、正統バラモン教の祭祀を否定した。そして、ガナ(教団)を有し、サンガ(僧伽)を有し、名声高く、ガナ(教団)の師として伝えられて

いる。また、その一方で、多くのガナ(教団)を有し、彼らのもつ思想や思想的意義の重要性は、多くの先学者の研究によつて証明されている。ただ、「沙門果経」は仏教側からみて他宗教を外道とし、彼らの説を否定してブツダの説法を肯定しようという形式を採っているので、資料的限界はあるが、特に「沙門果経」は個人名とその学説とが結び付けられて記録されているということもあつて、重要な資料であることは言を俟たない。

しかし、注意しなければならないのは、「沙門果経」に伝えられている六師の説は仏教側の曲解の当然予想されることであるし、ここに紹介されているのはかれらの主張の一部分でしかないということである。

これに関しては、中村元博士は、パーリ伝『沙門果経』における六師の学説は、マガダ語の痕跡を残しているのが、非常に古い伝承にもとづいているとする^①。また、渡辺研二は、六師の「教説の部分には仏教徒は手を加えず、それに続く教判の部分で仏教の優位を示そうとしていることが判った。したがって、經典の仏教徒の意見の部分を省けば六師外道の教説をかなり正確に取り出せる。」とする^②。

すでに南清隆によつて指摘されたよう^③に

*Samaññaphalasutta*では六師の名を列举する際、Pūraṇa Kassapa → Makkhalī Gosālā → Ajita Kesakambalin → Pakudha Kaccāyana → Sañjaya Belatthiputta → Nigaṇṭha Nātaputta⁽⁴⁾であるのに対し、六師の教説を述べる箇所は、Nigaṇṭha Nātaputta説とSañjaya Belatthiputta説との入れ替わりが生じており、Sañjaya Belatthiputta説に對してのみ、次の評文が見られる。

Ayan ca inesam samanābrāhmanānam sabba-balo
sabba-mulho/⁽⁵⁾

それら沙門、バラモンの中で最も愚かで、最も劣ったものである。

とあり、この文は、Sañjaya Belatthiputta説が六師の教説の中で最も愚かで最も劣ったものであると評されているのである。南は、この文がSañjaya Belatthiputta説のみに用いられているのは、その背景に注意すべき何らかの意図が存在する⁽⁶⁾ことを指摘している。

これに対し、*Anguttaranikāya Yodhajīva-vagga*には次のような一文が見られる。

Evam eva kho bhikkhave yani kanīci puthu
samanappavādānam Makkhalivādo tesam patikītho
akkhāyati/⁽⁷⁾

比丘たちよ、このようにあらゆる多くの沙門論師たちの中でMakkhalī論は最悪と説かれる。

とある。*Samaññaphalasutta*におけるSañjaya Belatthiputta説が沙門、バラモンの中で最も愚かで、最も劣ったものとする伝承と異なる。我々はこれらの伝承をどのように理解すべきであろうか。小論では原始仏教資料に基づいて一考察を加えたい。勿論、原始仏教資料を取り扱う場合、新古の層に注意することは当然である。

まず初めにSañjaya Belatthiputta説について考察したい。Sāliputta (舍利仏) とMahāmoggallāna (目連) の二人が仏教に改宗する以前、Sañjayaの弟子であったことはあまりにも有名である。

「沙門果経」ではMagadha国王のAjātasathuが以前にSañjayaを訪ねて沙門の果報について質問したところ、次のような回答があった⁽⁸⁾ことをGotama Buddhaに述べているのである。すなわち、

「師よ、質問されてSañjaya Belatthiputtaは私に次のように答えました。

『大王よ、もし、あなたがあの世は存在するかと尋ねた場合、もし、私がああ世は存在すると考えるのなら、私はあなたにあの世は存在すると答えるであろう。しか

「Tathagata (修行完成者) は死後、存在するのか、(以下、同様)。
下、同様)。

「Tathagataは死後、存在しないのか、(以下、同様)。

「Tathagataは死後、存在し、かつ存在しないのか、(以下、同様)。

「Tathagataは死後、存在するのでもなく、存在しないのでもないのか、(以下、同様)。」⁽⁸⁾

とあって、前述したように最後にSaṅgaya Belatthiputta説が「それら沙門、バラモンの中で最も愚かで、最も劣ったものである。」とあり、パーリ伝『沙門果経』では、六師の教説の中で最も愚かで最も劣ったものであると評されているのである。

このようなSaṅgaya Belatthiputta説は、一般に「懷疑論」「不可知論」「詭弁論」などと呼ばれている。ただ、Saṅgayaは、単なる「懷疑論者」ではなく、形而上学的な質問に対して確答を避けるということである。⁽⁹⁾

中村元博士は、「形而上学の問題に関して一方向的断定を下すのならば、人はそれに執着してたがいに相争うにいたるから、解脱を得るための妨げとなるので、このような論争から離れようとしたのであろう。すなわち、断定的な判断を下すとそれについて執着、個人的固執が

おこり、したがって自他ともに精神的平安を得る妨げになるといのであろう。」とし、さらに「かれは哲學的論争から遠ざかり、種々なる障礙から離れて、ひたすら解脱の目的を達成しようとながっていたのである。」⁽¹⁰⁾とする。

Saṅgayaの形而上学の問題に対する「懷疑論」の思想は、Gotama Buddhaの無記説(Suttanipita)の中でも古層に分類されるarthakavagga. parāṇavaaggaに十四無記など、極めてSaṅgayaに近い思想が見受けられる)やJaina教のSyadvādaに関係を有することは先学者によって指摘されている。⁽¹¹⁾また、高木神元博士は、「形而上学的な知のみの追求を配し、持律主義と修定主義に立っていることで仏教に最も近い立場にあった」とし、さらに、「最後に形而上学の問題を離れた持律主義と修定主義にサンジャヤを配したのは、戒を前提とした禪定の段階への展開を示している」とする。⁽¹²⁾南清隆は「似て非なるものこそ、世の人々を惑わす最も劣ったもの」というような考え方が作用しているのではないかという推測も成り立つ」としている。⁽¹³⁾

また、SāliputtaとMahamoggallānaの二人がSaṅgayaの形而上学の問題に対する懷疑論を離れて、Gotama

Buddhaに帰し、初期仏教教団の中心人物となったことを考えあわせると、Sañjāyasa説が「それら沙門、バラモンの中で最も愚かで、最も劣ったものである。」という評文は、Sañjāyasa説が六師外道の中で、

① 仏教と近い関係にあったということ、

② 仏教者（『沙門果経』編纂者）にとつて極めて有力な教団を有していたこと

を經典自身が如実に伝えていると考えられるのである。

さて、一方Makkhali Gosāla説についてどうであろうか。「沙門果経」ではMagadha国王のAjatasattuが以前にGosālaを訪ねて沙門の果報について質問したところ、次のように回答があったことをGotama Buddhaに述べられているのである。

すなわち、

「師よ、質問されてMakkhali Gosālaは私に次のように答えました。『大王よ、衆生たちには煩惱の汚れがあり、それらは因もなく縁もない。衆生たちは、因も縁もなく煩惱に汚されている。また、衆生たちは因もなく縁もなく清浄となる。自分が作り出すこともなく、他者が作り出すこともなく、人が作り出すこともない。力は存在せず、精進は存在せず、人間の精力は存在せず、人間の勢

力も存在しない。すべての衆生、すべての生物、すべての存在するものたち、すべての生命あるものたちは自在力なく、力なく、精進なく、自然の定まりと出会いと自然の性質によって影響支配されて六種の階級のいずれかにおいて苦と楽を感受する』

『また、実にこれら生まれの種類には百四十万種ある。また、他に六千種、及び六百種の生まれの種類がある。また、業には五百種あり、五種の業、三種の業、一種の業、半分の業がある。また、六十二種の道があり、六十二中劫があり、六種の生まれがあり、八種の人間の階梯があり、四千九百種の生活法があり、四千九百の遊行者がいて、四千九百種の龍の住居があり、二千種の感覚器官があり、三千種の地獄があり、三十六種の塵界があり、七種の胎生を有する生物があり、七種の胎生を有しない生物があり、七種の節のある生物があり、七種の神々があり、七種の人間があり、七種の鬼があり、七種の湖があり、七種の山、及び七種の山があり、七種、及び七種の険しい崖があり、七種、及び七種の夢がある。このようにして八百四十万の大劫があつて、この期間は愚者も賢者も流転して、輪廻して、やがて苦の終わりに至るであろう。この期間は私は戒行、苦行、梵行によつ

て未だ果報の熟していない業を成熟させよう、あるいは、すでに果報の熟している業を繰り返しその報いを受けつづけて、その果報を消滅しようということはない。実にこのように輪廻は苦樂が例えば枅によつて量り定められたものとして終わることはなく、盛衰もなく、増減することもない。あたかも投げられた糸毬が「その巻かれた糸の」終わるまで、解けていくように愚者も賢者も流転し輪廻しついに苦の終わりに至るであろう」と。⁽¹⁶⁾

このようにGosalaの教説は、決定論、宿命論といわれる。また、物事に原因を認めないということから無因論ともいわれる。また、GosalaはAjivika教の代表者としてしばしば仏典に登場する。

しかし、Makkhali Gosalaを賞讃する記述も一箇所のみであるが見られるのである。それはSamyuttanikaya II 3.10. に

「かれは苦行と〔悪を〕厭い離れることによつて、自己をよく覆つて、人々との論争をせず、平等で、罪過より離れ、真実を語るものである。実にかれはそのような悪をなすことがない」とある。⁽¹⁷⁾

また、*Anguttaranikaya Makkhali-vagga* では、Gosala

の教説が採り上げられている。ここでは、

「比丘たちよ、私はこれほど多くの人の無益のために、多くの人の無樂のために、多くの人の不利益のために、舞う人を、他に一人として見ない。すなわち、彼はMakkhali Gosalaである。たとえて言えば、河口の入り口に網を設置し、多くの魚類に損害と苦と損傷、喪失を招くようなものである。このようにMakkhaliという愚者は、人間の網として世に生まれ、多くの人々に損害と苦と損傷と喪失を招くものである。」

とある。⁽¹⁸⁾ また、前述したように*Anguttaranikaya Yodhujit-vagga* には次のような一文が見られ、仏典においてはGosalaの教説を厳しく非難している。

「比丘たちよ、このようにあらゆる多くの沙門論師たちの中でMakkhali論は最悪と説かれる。痴者Makkhaliは次のように説き、次のように語る。すなわち、業なく、業の果報なく、精進もなし」

とあり、業なく、業の果報なく、精進もないという思想が「あらゆる多くの沙門論師たちの中でMakkhali論は最悪云々」と批判の対象となっているのである。雲井昭善博士は「ゴータマの仏教からすれば、邪見、邪思、邪語を内容としたものであり、その限りにおいて、八支聖

道の正見、正思、正語を内容とする正命に相反するものであった」とする。⁽²⁰⁾

Makkhali説が「多くの沙門論師たちの中でMakkhali論は最悪と説かれる。」という評文は、六師外道の中で、①業なく、業の果報なく、精進もないという思想が仏教と相反する関係にあったということ、

② Makkhali GosalaがAjivika教という教団を有していたこと

を經典自身が如実に伝えていると考えられるのである。

以上、考察してきたことをまとめると、Sanjaya BelatthiputtaとMakkhali Gosalaの教説が「六師外道の中で最も愚かで、最も劣ったもの」「多くの沙門論師たちの中で最悪」と初期仏教資料に説かれるのは、それぞれに有していた思想や仏教側の事情によることが明らかとなったのである。(以上)

【注】

- (1) 中村元〔一九九一〕。
- (2) 渡辺研一〔二〇〇五〕。
- (3) 南清隆〔一九八三〕。
- (4) 六師外道の名の列挙については辻本俊郎〔二〇〇〇〕を参照されたい。

(5) PTS, *Dīgha Nikāya* vol.1, p.59.
(6) 南清隆〔一九八三〕。

(7) PTS, *Anguttara Nikāya* vol.3, p.287.
(8) PTS, *Dīgha Nikāya* vol.1, pp.58-59.

(9) 高木神元博士は「帰仏後の舍利弗が智慧第一と呼ばれ、主だった諸弟子の中にあつては、ゴータマ仏陀に代わつて最も多く法を説き、しかも仏陀の後継者として目されていた事実からすれば、初期仏教の思想と実践のいくつかは舍利弗を媒介として、その先師サンジャヤの思想ともかなり密接なかかわりを有していた」とする(高木神元〔一九九一〕)。

(10) 雲井昭善博士は「Sanjaya Belatthiputta説を『詭弁論』と捉え、Lokāyata派の思想を汲むものとして位置づけている。雲井昭善〔一九六七〕」。

(11) 中村元〔一九九一〕。
(12) 雲井昭善〔一九六七〕中村元〔一九九一〕渡辺研一〔二〇〇五〕など。

(13) 高木神元〔一九九一〕。
(14) 高木神元〔一九九一〕。
(15) 南清隆〔一九八三〕。

(16) PTS, *Dīgha Nikāya* vol.1, pp.53-55.
(17) PTS, *Samyutta Nikāya* vol.1, p.66.
(18) PTS, *Anguttara Nikāya* vol.1, p.33.

(19) PTS, *Anguttara Nikāya* vol.3, p.286.
(20) 雲井昭善〔一九六七〕。

【参考文献】

- 宇井伯寿（一九二五）『六師外道研究』『印度哲学研究』第二卷 甲子社書房
- 雲井昭善（一九六七）『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店
- 長尾雅人（一九六九）『出家の功德（沙門果経）』世界の名著『パラモン経典・原始仏典』中央公論社
- 南清隆（一九八三）『パーリ『沙門果経』の六師外道について』『印度学仏教学研究』第三二卷第一号
- 小林明美（一九八五）『出家の功德（沙門果経）』『原始仏典三』ブッタのよとば』講談社
- 南清隆（一九八五）『Sāmaññaphalasutta』『華頂短期大学研究紀要』第三〇号
- 片山一良（一九九二）『沙門果経』『原始仏教』第二号 中山仏書林
- 高木神元（一九九二）『高木神元著作集三』『初期仏教思想の研究』法蔵館
- 中村元（一九九二）『中村元選集』決定版』第十卷『思想の自由とジャイナ教』春秋社
- 梵文仏典研究会（一九九四）『梵文『沙門果経和訳（一）』』『佛教大学』『仏教学会紀要』第二号
- 梵文仏典研究会（一九九五）『梵文『沙門果経和訳（二）』』『佛教大学』『仏教学会紀要』第三号
- 辻本俊郎（二〇〇〇）『阿含・ニカーヤに見る六師外道の伝承について』追手門学院大学文学部『アジア文学化学科年報』第三号
- 渡辺研二（二〇〇五）『ジャイナ教 非所有・非暴力・非殺生—その教義と実生活』論創社
- 中宗根充修（二〇〇六）『初期仏典に見られる常住論、断滅論、無因論、及び縁起説の立場からの批判』『印度学仏教学研究』第五四卷第一号。
- Frauwaller, E. (一九五六) *Geschichte der Indischen Philosophie*, B. II, Salzburg (Trans. Eng. By V. M.Badeker, *History of Indian Philosophy*, vol.2, Delhi, 1973.
- Vogel, C. (一九七〇) *The Teaching of the Six Heretics, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes*, Band 39, Wiesbaden.

△付録▽

「漢訳六師外道資料一覽表」

本資料は、『大正新脩大藏經』に見られる六師外道についての記載にある資料のみを採り上げた。ただし、六師外道全員の記載のある資料のみに限った。したがって、他にも六師外道の中の一名、あるいは数名をあげている資料もあるが、煩瑣なることをおそれてここでは省略した。(表1)は漢訳資料、(表2)は、中国撰述資料である。また、各表には、利用者の便を図るため大正藏經の巻数、各資料のページ数、ゴチック体の数字として、六師外道の記述のページ数を明記した。(表1)は、大正藏經の巻数順に、(表2)に関しては出来るだけ撰述年代順になるように工夫した。

(表1)

大正1巻	「長阿含經」22巻、1上～149下、仏陀耶舎、竺仏念訳(後秦384～417)第2經『遊行經』(25上～中)第27經『沙門果經』(107上～109下)
大正1巻	『大般涅槃經』3巻、191中～207下、法顯訳(東晋317～419)(203中～204中)
大正1巻	『仏説寂志果經』1巻、270下～276中、竺曇無蘭訳(東晋317～419)(271上～276中)
大正1巻	「中阿含經」60巻、421上～809上、僧伽提婆訳(東晋317～419)第207經(781中～782中)第208經(783下～784上)
大正2巻	「雜阿含經」50巻、1上～373中、求那跋陀羅訳(劉宋420～479)第105經(31下～32下)第978經(253上～下)第1177經(316下～317中)第1226經(334下～335中)
大正2巻	「別訳雜阿含經」16巻、374上～492上、失訳第53經(391下～392上)第110經(413上～下)
大正2巻	「増一阿含經」51巻、549上～830中、僧伽提婆訳(東晋317～419)(727下～728上)(752上～下)(762上～764中)

大正3卷	『仏本行集經』60卷、655上～932上、闍那崛多訳(隋581～619) (722 上) (826 上～ 827 下)
大正3卷	『仏説衆許摩訶帝經』12卷、932上～975下)、法賢訳(宋960～1126) (969 中～下)
大正4卷	『仏説義足經』4卷、174中～189下、支謙訳(呉222～280) (180 下～ 181 下)
大正12卷	『大般涅槃經』40卷、365上～603下、曇無讖訳(北涼397～439) (474 上～ 477 下)
大正12卷	『大般涅槃經』36卷、605上～852中、慧嚴訳(宋420～479) (717 中～ 719 下)
大正14卷	『仏説維摩詰經』2卷、519上～536下、支謙訳(呉222～280) (522 中)
大正14卷	『維摩詰所説經』3卷、537上～557中、鳩摩羅什訳(後秦384～417) (540 中～下)
大正14卷	『仏説無垢称經』6卷、557下～588上、玄奘訳(唐618～907) (562 中)
大正14卷	『仏説德護長者經』2卷、840中～850中、那連提耶舍訳(隋581～619) (840 中～ 843 上)
大正18卷	『陀羅尼集經』12卷、785中～897中、阿地瞿多訳(唐618～907) (785 中)
大正19卷	『大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切呪王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧呪品』19卷、180上～188下、失訳 (180 中)
大正20卷	『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經』10卷、725上～775下、不空訳(唐618～907) (772 下～ 775 下)
大正22卷	『四分律』60卷、567上～1014中、仏陀耶舍、竺仏念訳(後秦384～417) (791 上～下) (946 中～下) (952 上～中)
大正23卷	『十誦律』61卷、1上～470中、弗若多羅、鳩摩羅什訳(後秦384～417) (268 下～ 269 中)
大正23卷	『根本説一切有部毘奈耶』50卷、627上～905上、義浄訳(唐618～907) (691 中～ 693 下)
大正24卷	『根本説一切有部毘奈耶破僧事』20卷、99上～206上、義浄訳(唐618～907) (106 下～ 107 下) (142 中～ 143 上)
大正24卷	『根本説一切有部毘奈耶雜事』40卷、207上～414中、義浄訳(唐618～907) (329 上～ 333 下) (396 上～ 397 上)
大正24卷	『鼻奈耶』10卷、851上～899下、竺仏念訳(姚秦384～417) (877 中～下)
大正27卷	『阿毘達磨大毘婆沙論』200卷、1上～1004上、玄奘訳(唐618～907) (1002 中)

(表 2)

大正38卷	『注維摩詰經』10卷、327～421、僧肇(374～414) (350中～351上)
大正37卷	『大般涅槃經集解』71卷、377～611、宝亮(444～509、509年編) (510下～511上)
大正38卷	『維摩義記』8卷、421～518、淨影寺慧遠(523～592) (452上～中)
大正46卷	『摩訶止觀』20卷、1～140、智顛(538～597、594年撰) (132中)
大正38卷	『維摩經義疏』6卷、908～991、吉藏(549～623) (941上～中)
大正42卷	『百論疏』9卷、232～309、吉藏(549～623、608年撰) (244中～下)
大正38卷	『說無垢称經疏』12卷、993～1214、窺基(623～682、672撰) (1046下～1047上)
大正38卷	『維摩經略疏』10卷、562～710、湛然(711～782) (621上～中)
大正46卷	『止觀輔行』40卷、141～446、湛然(711～782、765年述) (436上～下)
大正85卷	『淨名經集解關中疏』2卷、440～501、道液(-765-) (459上)
大正54卷	『一切經音義』100卷、311～933、慧琳(737～820、788～810年編) (475上～中)
大正36卷	『華嚴經演義鈔』90卷、1～701、燈觀(737～838) (52上)
大正48卷	『宗鏡錄』100卷、415～957、延壽(904～975) (685中)
大正54卷	『統一經音義』10卷、934～979、希麟(不詳、987年編) (971中～下)
大正54卷	『翻譯名義集』7卷、1055～1185、法雲(1088～1158、1143年編) (1085上～中)
大正85卷	『維摩經疏卷第三、第六』2卷、375～423、不詳 (386中)